

安部公房の読者のための通信 世界を變形させよう、生きて、生き抜くために！



月刊

もぐら通信

Mole Gazette for Kobo Abe's Readers

2014年3月31日初版 第19号

www.abekobosplace.blogspot.jp

あなたへ：
迷う事のない迷路を通して
あなただけの番地に届きます

このもぐら通信を自由にあなたの「友達」に配付して下さい



場の位相

「基地」池田龍雄

2010.6

基地よ

武器よ

砲弾よ

いわんや核よ

君らにできる最善のことは

何もしないこと

この地上から

温和しく

跡形もなく消え去ることだ

そうすれば平和

恒久の平和が来るだろう

目次

表紙：池田龍雄

- 1。目次...page 2
- 2。安部公房氏との打ち合わせ記録（3）：長与孝子...page 3
- 3。安部公房---乏しき時代 (Die dürftige Zeit) の作家：稲垣健...page 10
- 4。安部公房の書棚を尋ねる：岩田英哉...page 17
- 5。私の本棚より：『安部公房を語る』（あさひかわ社）：wlallen...page 19
- 6。『R6 2号の発明』小論：wlallen...page 21
- 7。安部公房と谷崎潤一郎：岩田英哉...page 23
- 8。岡田裕志の編集部員辞任について：編集部...page 30
- 9。ご寄稿に際してのお願い...page 32
- 10。読者からの感想...page 33
- 11。合評会...page 34
- 12。本誌の主な献呈送付先...page 34
- 13。本誌の収蔵機関...page 34
- 14。個人情報保護方針...page 34
- 15。編集方針...page 34
- 16。バックナンバー...page 34
- 17。ニュース&記録...page 34
- 18。もぐら通信総目次・索引...page 34
- 19。編集者短信...page 35
- 20。編集後記...page 36
- 21。次号予告...page 36

お知らせ：電子媒体(PDF)で閲覧されている場合、ツールバーにページ数を入力して検索すると、恰もジャンプ・シューズを履いたかのように、そのページにジャンプします。

安部公房氏との打ち合わせ記録（3）

～「長与日記」より・NHK放送番組関連～

長与孝子

1957年(昭和32年)11月26日(水)

夜、安部公房氏と打ち合わせあり。NHKの休憩室にて待ち合わせ、新橋の「蛇の新」に行き日本酒、その後、烏森のお好み焼「烏」にてビール、蛤、牡蠣など。来年1月放送の「お婆さんは魔法使い」についての打ち合わせは簡単にして、専ら、ミュージカルス、SF、コメディの演技論、これからの舞台芸術、理性と衝動、人間の本能と感情の年齢に伴う交叉論などについて話あった。特に、オペラやオペラッタと異なるミュージカルスには、未来の芝居としての新しいエネルギーが存在すること。単なる歌入りドラマではなく、台詞の高揚にしたがって必然的にリズムカルになってゆくものではないか。私は一年ほど前からミュージカルスに非常な興味をもって、まだ幼稚ではあったが幾つかミュージカルスの番組を製作していたので、安部氏との話し合いには非常に興味をそそられた。

又、サイエンスフィクション小説、ドラマについては、ずっと以前から好んで読んでいたので、その理由が公房氏の談話により明確になった。SFとは、単なる変わった空想の面白さや、異次元の世界創造の興味を描くだけに終わるものではなく、そうした別次元との対比によって、現実の実態が明確に見えてくる所に面白さがある、例えば、不等辺三角形の面積はそのままでは計出不可能だが、補助線を新たに設定することによって、面積の計測が可能となる。SFとは例えばそのようなものだ。私には多いに共鳴するところがあった。しかも、公房氏の持ち出す補助線は実に奇想天外で創造的ですし、すごいイマジネーションを惹起するので、彼こそ天才であり稀にしか生まれない先駆的作家だと思う。氏のそれまでの作品を読んで、その想像力の豊かさに惹かれて、軽い気持ちで「子供の時間」に初登場を願ったが、話せば話す程奥行きが深く、しかもどんなものにも興味を示され、単純な攻撃性を直ぐに出す事もない、ばかばかしい規制の多いNHKの訂正要求に対しても真っ向から怒る代わりに、規制しようもないもつとすごくもつと怖くもつと広がりのある表現に変えて見せる、ユーモア精神は実に見事と言うほかはない。私は、この安部公房氏を発見し、NHKに引っ張りこみ、こうして話しを伺い或いは対話できることに最高の悦楽を感じている。

11月28日(金)

夜8時から、文化放送の安部公房作「棒になった男」を聞く。実際の街の音とジャズを背景に、飛び降り自殺した男が何故か「棒」に変身、語りとモノログで話しを進めていく、散文詩的構成。街の声と子供の声、そして地獄の男の出て来るところが安部さんらしい。棒になった男と言う超現実を現実社会に投げ込むことによって現実の実態が様々に見えて来る。安部氏の一貫した手法ながら、自殺して棒になった男への、周囲の非情さ、無関心、恐怖…。しかし演出的にはいろいろな要素を取り入れ過ぎ、まとまらずに終わった感がある。ジャズもスローテンポで、音響のもっと細かい変化、微妙な感性がほしかったと言う、安部公房氏の意見も判る気がする。

11月30日(土)

表現主義と言うものは、或意味でごまかしではないかと思っていたが、安部公房氏の作品を読んでもみると、事実をデフォルメし、超現実化する事によって、より現実の本質をあばき出すことが出来るとしたら、氏の作品も又、表現主義と言えるのではないかと思った。カフカやブレヒトのように。安部氏もまた、彼等を好んでいられたから。

1958年(昭和33年)1月2日(木)

安部公房作「おばあさんは魔法つかい」放送。

これは、正月休みで田舎に帰った子供の空想性を描いた作品であるが、「おばあさんの口のまわりが血でべったりとぬれ」と言う表現が問題になった。怖すぎるというのである。安部氏に言ったら、彼は事も無げに言った。「ハッハッハ。それなら、『口のまわりが何かでべったりとぬれ』にしよう。その方がよっぽど怖い」と。そのとき、私は思った。氏が、無駄な抵抗はするな。むしろそれを逆手にとって、もっと本質的な表現を発見すればいいと言われたことを。

2月4日(火)

他の番組を二本収録し、息抜きに外でコーヒーをのみ、6時頃帰って来たら、安部氏より再三電話があった由。その時、丁度また電話あって新橋にいたのでトリスバーに来ないかとのこと。着いた時には氏は二階でもう相当酔っていられた様子。急ピッチで飲まされた。昨年講談社から刊行された小説「けものたちは故郷をめざす」の署名入り本をいただく。9時、トリスバーを出て、末広と言うお好み焼きに行き、日本酒をたて続けに飲まれる。これでは危ないと思ったので、NHKに

車の券を取りに行き戻る。大阪のNHK在局の和田勉と言う者が、安部氏を紹介してほしいと言っている旨を伝える。10時頃、車で野方に送って帰る。

2月5日(水)

午後5時にNHKを抜け出して、安部氏にいただいた招待券で、銀座のガスホールにソ聯の記録映画「この目を見たソ聯」を見に行く。仏伊墺独合作ヴィスタヴィジョン。色は綺麗だが退屈。面白かったのは、各共和国の民族生活やシベリヤの遊牧民を描いたところのみ。軒をかいている評論家らしい人もいた。

2月6日(木)

夜、改めてカフカの「変身」を読む。やはり安部公房氏の好みそうな作品だ。そこには、虫に変身した理由も目的も結論も何もない。従って人生論も教訓も全くない。しかも、現実には有り得ぬことが起こったことを全く驚き無しに平然と描いている。そして悲しまれるべき死が、そんな感情もなしに、虫けらの死としてむしろ歓迎されている冷たさ。しかし、有り得ぬことを描いていながら、現実の本質を鋭く暴いて見せる恐ろしさと可笑しさ。そこには何の啓蒙性もなく、只実存あるのみ。人間は孤独でなくてはだめである。孤独は客観の場であり、思想の生まれる所でもある。「そりゃあ君、そうだよ。孤独は大切だよ君」—安部公房—
安部さんの評論は、敢えて言えば、認識あるいは常識のその又常識の極に迫っている。しかも極めて論理的に。常識をひっくり返し、更にひっくり返してゆくから遂に判らなくなり、常識とは全くかけ離れているかのように錯覚するが、結局は至極純粋な真理、或いは常識を提出しているのだと思う。

6月27日(金)

安部公房氏より電話あり。明日、中村氏と俳優座の芝居を観に来てくれとのこと。

6月28日(土)

俳優座へマチネエを観に行く。「幽霊はここにいる」 戦争で死んだ兵士の幽霊といつも一緒に居ると信じている男と、その幽霊を利用して儲けようとする人々。それは資本主義のからくりを見事に描いているばかりでなく、登場人物の個性の面白さ、叙情性の豊かさもあって、実に面白い芝居だった。眞知夫人の装置もよく考えられて居たし、群衆の黒い傘の行列も効果的だった。

12月31日(木)

年末特集、安部公房作「豚とこうもり傘とお化け」 とある森の中で、町から逃げ出して来た豚と、風に飛ばされて骨がばらばらになったこうもり傘と、理科の実験

室の標本箱から骨を抜いて這い出して逃げてきたお化けの三人が、互いに、豚の骨を共有しつつ暮らす話し。骨を共同で使うと言うのは、共産主義的発想でもあるが、それが豚と傘とお化けと言うのは、何と奇抜な構想だろう。しかも、子供達を引率してそこへやってきた理科の先生が、「こんなでたらめは、教育上がまんがなりません」と言って、皆と骨を袋に入れて捨ててしまう結末も又皮肉である。この原稿をいただいて読んだ時、笑いながら且つ感心した。互いに骨を抜いたり入れたりする音には、ひどく苦勞したけれども。

1959年(昭和34年)

3月

いよいよ半年にわたる安部公房氏作連続ドラマ「ひげの生えたパイプ」の提案が通った。もともと、この時にも一悶着あった。毎年、会長が年度初めの前に、国会で予算と放送内容の報告を行うことになっているが、そこで安部公房の名前が出るのはまずいと言うのである。再び「キッチュ クッチュ ケッチュ」の時のようなやりとりがあったあげく、それでは放送を5月に延ばせと上層部から言ってきた。4月からだと放送一覧表に載せなくてはならないが、5月の開始なら載せなくともすむからと言うのである。随分姑息な手段だと笑ったが、安部氏は率直に受入れて下さった。そして、取材にはダムエ事の現場が見たいと言われた。建設省や電力会社などに問い合わせた結果、四国愛媛県の鹿野川ダムにきめた。松山放送局に電話し、かねて知り合いの一戸局長にすべての手配を頼んだ。帰りは高知に寄るつもりだったので、そちらへも連絡した。女性ディレクターが男性作家と何日も一緒に出張するのは初めてとのことで、ここでも又一騒動あったが、何とか許可が出て、3月27日から4月2日まで安部氏と同行取材。

3月27日

安部氏、12時30分のハトで先に大阪へ。私は一仕事すませて23時55分東京駅発の夜行で大阪へ。飯沼氏茅か崎まで帰りがてら送ってくる。

3月28日

12時8分大阪着。安部氏の泊まっているグランドホテルへ。大阪局(BK)の横尾部長、和田勉、同期生の赤木などホテルに安部氏表敬訪問。労音の浅野氏訪問。16時30分、別府航路にて松山へ。四人の特別2等しか取れず。安部氏上段のベットに替わって下さる。一晩中書き物をしていられた様子。一人2235円。夕食は小鯛など。夜半、安部氏と甲板に出て瀬戸内海を眺めながら雑談。

3月29日

朝4時起床、船のエンジン音など録音。まだプロットも固まっていないので、何が出て来るかわからない。録音可能なものは全部採って置く。5時15分高浜着。まだ湯屋が開かないので松山局の当直室でしばし休ませてもらう。6時半道後温泉へ。江戸時代そのままの建物。三階の屋根から提灯が沢山ぶらさがっている。一部屋借りると、高杯でお茶が運ばれ、浴衣も揃えてある。安部氏、湯にはいる。町に出て甘美屋にて朝食。迎えの車で松山局に戻る。

9時一戸氏出局。鹿野川ダム、室町、戦国時代に活躍した、村上水軍(海賊)の根拠地、来島など取材打ち合わせ。

10時、局車でダムへ。局員の内田嬢案内。

12時30分鹿野川ダム着。県事務所にて、教育長、ダム建設所長、事務課長などに話しを聞く。

13時30分、昼食をご馳走になり、ダム見学。湖辺を局車で一周、まだ未完成の所もあって、冷や冷やす。ダム壁内部の監査路も案内してもらう。安部氏曰く、これはスリラーに向くね。一般の人はめったには入れないから、ここで殺人があったとしたら…などと早速想像力が働きた様子。お礼に2千円置いて16時鹿野川発、帰途につく。

18時半松山局着。一戸氏、待っていて、山彦なる料亭に案内、海老の殻の空揚げが出たが、足がいっぱいでもぞとして食べなかったら、安部氏にからかわれ、目をつぶって食べてみると、なかなかおいしかった。

21時、道後温泉の川吉別荘に送られて泊まる。

3月30日

午前風雨、夕方晴れる。9時半道後温泉出発、松山局に寄り松山駅へ。10時32分、準急瀬戸に乗り、今治へ。今治局佐伯局長の出迎えを受けて、昼食をとりながら打ち合わせ。

13時今治港発、海上保安庁の巡視艇で来島(くるしま)に向かう。長井通信員、安部公房氏の取材のため同乗。船長、機関長ほか五名。大島東端をまわって能島へ。能島(のしま)は小さいが、水軍の砦として上部が平らにけずられた跡がある。武司島、馬島をまわって来島へ。この海峡は潮流が異様に速く、11ノットの巡視艇では押し戻されてしまう由。島に接岸できないので漁船を雇って来島に上陸。西北の岩盤上に杭打ち跡あり、平らな山頂に城塞跡を見る。

17時今治港着。タイガーと言うレストランで佐伯局長と夕食。今治局は主として中継局だが、たまに地元への生放送がある時は、防音スタジオが無いので、家族が外に出て車や大、鶏を通行止めにしたり、追い払ったりするのだとのこと。前

に甲府放送局で聞いた、音楽番組の生放送中に窓から猫が入り込んで来て、大いに弱ったという話を思い出してをかしくなった。

19時、瀬戸内バス会社の応接室で史談会、観光協会長などの話を聞く。面白かったのは、村上水軍が発明したという、木造の潜水艦設計図と想像図だけだった。23時観潮楼に泊まる。安部氏、鰹のこのわたを美味しいと召し上がり、日本酒何本も。ほかに、鯛の刺身、いかの椀漬、蟹の煮付けなど。午前2時過ぎまで談論。専ら作家の想像性の展開がいかなるきつかけをいかに把握するかによつて決まるかと言う事など…。

3月31日

朝、8時起床。展望台に上る。瀬戸内海の島々を見渡すと、このあたりがいかに水軍だか海賊だかの出没に好適な地形であるかが判る。

11時近く、女中に安部さんの様子を見せにやる。

11時過ぎ朝食。12時半観潮楼発。今治局に寄り、14時38分の汽車で松山へ。15時53分松山着。

一戸局長の案内で松山城など市内観光。安部氏、伊予餅を買ってくださったので、家に送るよう店に依頼。

18時半、一戸氏と料亭へ。蟹、海老の刺身、さよりの干物、筍木の芽合え、昆布汁など、それに日本酒。鮎が相当甘口で閉口した。

22時半頃、道後温泉のNHK寮に泊まる。

4月1日

曇り。午前6時起床。6時半朝食。7時局車にて出発。一戸氏、入浴のスタイルで見送りに来る。7時40分砥部着、町長の案内で、瀬戸焼、土器などを見る。8時半、鹿野川沿いに走り、高知との県境、高研山に至る。鶯の谷渡りしきり。山桜満開。トンネルを抜けて、13時、檜原(ゆすはら)着。ここまで曲線に次ぐ曲線、まるで自動車教習所のコースみたいだと安部氏言われる。山頂に近いと思われるNHK檜原中継所の森本所長出迎え。旅館にて昼食。山菜が多いのはいいが、刺身などが出てくると、ちょっと考えてしまう。

15時、東津野村着。久川助役の案内で、キリシト村、三楯蒸し所など案内される。キリシト村は、明治になって宣教師が来て、あちこちに信者が出来た由。こんな山奥までと驚く。クルス型の穴の開いた屋根を持つ家を見る。記念にと三楯で作った和紙をもらう。

16時半、東津野発、16時45分頃、あまりにカーブがすごいので休憩。一戸氏にもらった蜜柑ジュースを飲む。

19時半、高知NHK着。松山の戸氏にお礼の電話。安部氏は御自宅に連絡。大変いい運転手だったと松岡さんに500円のチップをやって下さる。細やかな心遣いのある人だと思った。疲れたが、高知局樋口放送部長ほか数名、安部氏の歓迎会と称して、今晚の宿「鈴」にて宴会。酒盗、鰹の刺身、肉のしんこ揚げ、山菜各種など。飲んで歌って大騒ぎ。23時、部長達帰ったのでほっとして、安部氏と部屋で慰労会。ブレヒトの話などして、24時半頃就寝。

4月2日

8時15分起床。10時半「鈴」発、和紙工場見学。高知放送局にて安部公房氏のインタビュー録音。12時45分より市電会館のグリルにて、長倉局長主催の歓迎会。13時半、グリル出発、安部氏がレインコートを忘れられたので「鈴」に寄り、それから、御免部落を通過して鍾乳洞「龍河洞」に案内される。宿の二階で浴衣をはおり、素足に草履と言う姿になり、案内嬢の誘導で入洞。鍾乳石、原始人住居跡など見学。出て来た時、安部氏に絵葉書、菓子などの土産いただく。尾長鶏が沢山高台の上にて珍しかった。

15時半、局車で出発。16時高知飛行場着。全日空58便にて16時45分発。松山局の運転手、松岡さんも見送りに来てくれた。離陸の時、飛行機があまりにゆれたので、恐怖にかられた。

17時45分、大阪、伊丹飛行場着。夕食を共にし、喫茶店でコーヒーを飲み、安部氏と別れる。4月末から連続ドラマの録音が始まるのでよろしくと約束して。

(上記は取材メモにすぎないが、この時期の日記とその後の「ひげの生えたパイプ」収録当時の記録、つまり1959年前半分は別記とあるのみでその所在は現在不明)

(続く)



Rhonus tembor blacerat.

安部公房---乏しき時代（Die dürftige Zeit）の作家

--- 三浦雅士の安部公房論を読んで ---

稲垣健

三浦雅士の安部公房論は、安部公房全集第三十巻の「贗月報」、そして、著書『人生という作品』（「貨幣と小説——安部公房の座標」）に収められている。

この評論は極めて刺激的だ。まず、このタイトル名『貨幣と小説—安部公房の座標』が意表を突く。

安部公房について論じた文章は多数あるが、経済活動と言語活動の類似性に視点をおいて、地球的規模の歴史的出来事のただ中に立つ安部公房を論じた評論は、私が知る限り、この後にも先にも見当たらない。

ここで私は「評論を評論する」ようなことをするつもりはない。この極めて刺激的でユニークな、安部公房論の論旨を追いかけつつ、最後に読者の方々とある風景、いや、光景を共有できたらと思う。

まず三浦は「二十世紀を代表する表現者としての安部公房」ということから論を展開する。

「二十世紀を代表する表現者」といえば、マルクス、ニーチェ、ハイデガー、フロイトなど、誰もが認める思想家たちがいるが、三浦は、安部公房を彼らと肩を並べる「表現者」と位置付けている。

しかし、これほど重要な作家の集大成である編年体の全集が刊行されたにもかかわらず「読書界一般の反応が鈍い」。それは「頭脳の現在には・・・刺激が強すぎる」し、そして、なによりも「それを受け入れるための図式がなお明確に描かれていないため」と、「頭脳の現在」にややため息混じりに同情する。

この評論が書かれたその時点において「二十世紀が終わって」おらず、時代そのものの決着がついていなかった。それだけでなく二十世紀を代表するこれら思想家たちについても決着はついていない。だから、「受け入れるための図式がなお明確に描かれていない」。

したがって、時代は安部公房を受け入れるに至っていない。現状況を見渡しても、このことは二十一世紀になった現在も何ら事態は変わっていないと言えそうだ。

さて、三浦は、こうした二十世紀を代表する思想家のひとり、カール・マルクスを取り上げ、その主著『資本論』にフォーカスをあて、安部公房の思想を解き明かす。

『資本論』と安部公房。一般的には、なにかミスマッチな印象がある。共産党に入党していた時期もあるので、両者に接点がないわけではない。しかし、三浦は、「接点」どころか、安部公房は『資本論』を読み込み、さらに自らの作品を通して、これを批判しているという。

すでに、鳥羽耕史が著書『運動体・安部公房』において、『壁-S・カルマ氏の犯罪』は『資本論』のいわゆる「価値形態論」の部分の剽窃であると論じているが、三浦も同じ箇所を取り上げている。

『資本論』のこの箇所では、要約すれば「商品の価値は労働者の労働力の外化によって形成される。その商品と交換される（代わりとなる）貨幣の体系は、労働力がいわば実体化された至上の商品（本物）としての『金』が支持している」ということが語られている。

言い換えれば、経済活動は「本物／代わり」の二項対立が前提になっており、「本物（商品）」の中で至上の「本物（商品）」は、どのような「本物（商品）」とも交換できる『金』であり、その『金』が「代わり（貨幣）」の体系の根拠となっている。この『金』の価値を裏付けているのが労働力であるというのだ。

さて、『壁-S・カルマ氏の犯罪』は、自分の名前が名刺となって、それが勝手にふるまっていく話である。「そこでは名前が名刺というひとつのモノになって動きまわる」・・・「「代わり」が「本物」となり、「本物」が「代わり」となる」。「物語の異様さは、・・・「本物」が「代わり」よりも重要であり、優位に立っているはずだという「常識」が完全に覆されることから生じている。」

（『人生という作品』 p150）

これを『資本論』にひきよせて語るならば、この作品では、「本物」と「代わり」の二項対立が喪失したフラットな世界が描かれており、「労働力」が外化した本物の「商品」も、その代わりとなる貨幣も、また、貨幣体系を支える超越的な商品でありつつ、貨幣でもある『金』もこの作品世界では意味を失ってしまっているのだ。

これがなにを意味するのかを的確に説明する岩井克人の『貨幣論』の文を、三浦は引用する。

「本物」の貨幣の「代わり」がそれ自体で「本物」になってしまうという小さな「奇跡」とは、結局、歴史の始原において貨幣を貨幣として「あら」しめたこの大きな「奇跡」の系譜こそ、それ自体は価値のない鋳貨や紙幣をそれ自体で充実した価値をもつ金商品のたんなる「記号」とみなすことによって、商品世界に実体的な根拠を確保しようとしたマルクスの「価値記号論」にたいして、事実の力で異をとなえるものである。それは、同時に「本物」とその「代わり」、いや記号されるものと記号するものとの対立関係を厳密に階梯化することによって、真理や本質や実体といったそれ自体はいかなるものの記号にもなりえない「超越的な記号されるもの（トランセンデンタル・シグニファイド）」の場を究極的に確保してきた古典ギリシャ以来の伝統的な記号論にたいして、事実の力によって異をたてるものなのである。（岩井克人『貨幣論』より）

つまり、「本物／代わり」の二項対立の無効は、マルクス思想に異をとなえること、さらに西洋思想を支配してきた「記号論」に対して異をとなえることを意味することとなる。

安部公房は、『資本論』をベースに己の筆が走るがままに『壁-S・カルマ氏の犯罪』を書きあげたが、そのテーマとするところは極めて深刻なものだった。一定の政治的な問題意識から共産党に入党したかもしれないが、実は、共産党が「経典」とする『資本論』を根本から批判する視点を、すでに、彼は持ちえていたのだ。

なぜ、安部公房はこうした視点をもちえたのか？ 三浦は、リルケ体験が大きく影響しているとし、作家の十代の時のエッセイ『詩と詩人』を取り上げる。

「詩と詩人」は・・・いわゆる現象学的還元、すなわち「世界空間をはらんだ風が／わたしたちの顔を削ぎとる夜」の体験が、じつに的確に、見事に語られる。「ふと気付いて見れば、常に形象に伴ってのみ現れると思われていた彼の意味・内容が、何時か一人形象を離れて無限の空間の中に漂っている」という体験である。語りは生々しく真に迫っていて、これは十代の安部公房自身の体験であつたに違いないと思わせる。急に闇が恐ろしくなってくる、灯りをつければ落ち着くに違いない、そう思って灯りをとす。・・・「四方の壁は消え去せて自分は何んの足場もない暗黒な宙に一人漂っていたのだ」（『人生という作品』p162）

恐慌の体験、狂気の体験とはこういうものだろう、と思わせる。続く「意味がよく形象に伴っているのは、意味の性格であると云うよりは、寧ろ人間の在り方の性格だったのだ」という一行もまた的確だ。貨幣も言葉も客観的な価値としてあるわけでない。思い込まれた虚構として、すなわち「人間の在り方の性格として」あるだけなのだ。（同p163）

こう言い換えていいだろう。日常の惰性を判断停止した現象学的還元の結果の透明化された世界のただ中に宙づりにされた孤独において、決定的な意味付与の視座などない。ただ「人間の在り方」という相対的な生の在り方しかありえないのだ。

三浦は続ける。

「詩と詩人」を一貫して、たとえば主観客観問題においても真理問題においても、つねに悪循環の無限遡及が示唆されていることが、安部公房が「人間の在り方の性格」をどのようなものとして捉えていたかをよく示している。「より高次の人間の在り方である展開は自ら次元を上へ上へと乗り越えて、限り無き円を回転し続けるのだ」という末尾近くの一行はその認識を示している。その後最後の一節が続くが、それはこの無限の悪循環への詩人の身を賭した抵抗・・・それはまた身を預けることでもある・・・として読むことができる。（同p164）

この後、「此処に於いてこそリルケのディンゲ（Dinge）は、永遠の客観性を持つのである。世界内在とは一瞬に於ける夜の具体的直覚である。悲しき反照の対立は消え去って、言葉無き夜が身近にせまり、肉体を押し包む永遠の一瞬なのだ・・・。」という最後の一節が続く。

安部公房の「リルケ体験」とは、「言葉無き夜」の体験、それは、また決定的な意味付与の視座などない「人間の在り方」、しかも、無限上昇の螺旋運動に身を投じた相対的な生の在り方の骨身にしみるほどの体験だったのだ。

これは「本物／代わり」の対立も無効となる、『金』から離脱した現代の資本主義社会の本質を表している。安部公房が、マルクスによる経済活動と社会の解析に共鳴しつつ、それを批判的に解釈する視点を持ちえたのも、以上のような「リルケ体験」があったからこそとなる。

安部公房のリルケ体験は、十代に始まるが、後に公式には「清算」されてい

る。皮肉っぽい語り口のエッセイでリルケを揶揄しているのだ。しかし、三浦は、安部公房にとっては、リルケはそれほどまで気になる詩人であり、終生、影響は受け続けたという。

だが、リルケの影は、・・・最後の最後まで執拗につきまとっている。当然である。安部公房はリルケを、ハイデガーが指摘するようにニーチェ以後の詩人、ニーチェによって示された課題を担う詩人として扱っていたからである。・・・安部公房はリルケが担った課題を骨身にしみるように受け継いだのであり、・・・その課題のなかにマルクスを位置づけたのであって、逆ではない。すなわち、マルクスのなかにニーチェの課題、リルケの課題を位置づけたわけではなく、ニーチェの課題、リルケの課題のなかにマルクスを位置づけたのである。この独自性は比類なく、きわめて貴重である。（同p137）

安部公房が、終生、影響を受けたリルケ。そのリルケの課題は、ニーチェの課題でもあった。三浦は、ハイデガーを援用しつつ、その課題を「神の死」、まさに「ニヒリズム」とする。これをハイデガーに従って表現すれば、「形而上学の完成＝終わり」となる。

伝統的西洋思想において、ソクラテス以降、善のアイデア、神など、「至上の存在者」が、自然（存在者全体）を在らしめる超越的な座を占有してきた。この歴史をハイデガーは「存在忘却の歴史」と名付ける。これはそのまま形而上学の歴史でもある。自然からのエネルギーの篡奪と自然破壊、人間的生の矮小化などは存在忘却の結果なのだ。

このようなハイデガーの思想に影響をあたえたのがニーチェである。ニーチェがいう「神の死」とは、世界の意味を一元的に担う神は死んだということ。これは自然（存在者全体）を規定するある「超越的存在者」の座が空位となったこと。すなわち「形而上学（Meta-Physik）の完成＝終わり」を意味する。

これはまた先の『壁—Sカルマ氏の犯罪』の『資本論』解釈とも重なる。マルクス自身は「労働」によって不動の価値を位置づけられた『金』のような「存在者」を超越的な場に据えたが、容赦ない資本の自己運動は、「本物／代わり」の二項対立、そして、『金』の位置づけそのものを無効化した。この状況を作品をもって表現した安部公房は、リルケを通して「神の死」「形而上学の完成＝終わり」という歴史的出来事を相貌とする時代（エポック）を体験していたのだ。

このような時代（エポック）をハイデガーはヘルダーリンの詩『パンと葡萄

酒』で使われている「乏しき時代 (Die dürftige Zeit) 」という言葉で表現する。

神々、および神が去ったばかりではない、神性の輝きが世界史から消えてしまったのである。世界の夜の時代は、乏しき時代である。なぜならそれがますます乏しさを加えてゆくからである。それはすでに甚しく乏しくなってしまうと、もはや神の欠如を欠如として認めることができないほどになっているのである。
(ハイデガー「乏しき時代の詩人」手塚富雄、高橋英夫共訳)

乏しき時代とは、「形而上学の完成＝終わり」でありつつも、「神のようなもの」が未だに訪れない時代をいうのである。

「二十世紀を代表する表現者たち」・・・彼らの表現の根底には、「神の死」の体験があった。「神の死」と誰もが口にはできるが、それはマルクスを金本位制に向かわせるほどの耐えがたい徹底した相対的な世界・・・プラトンの超感覚的な存在と感覚的な存在の二項対立を転倒するに留まらない、両者が宙づりになった世界・・・恐らくは、それを前にした者は全身身震いするような、絶望さえも剥奪された世界・・・彼らは、二十世紀の歴史的相貌であるそうした世界を骨身にしみるほど体験してしまっていたのだ。

安部公房は、このような未だ「神のようなもの」が訪れない乏しき時代において、言語表現を先鋭化させながら追求していった。なぜなら、言語の世界はそもそも「根拠が不在」（「庇護なき存在」（リルケ）」であり、また、その言語が「生そのものより冒険的である」（リルケ）ことも、また彼はリルケから「骨身にしみる」ほど叩きこまれたからだ。

初期の作品はこの無根拠を、ある意味不器用に、しかし、読者の心に直接響くような虚無体験として描いている。そして、この虚無とともに剥き出しになって現れた即物的な物象は、一定の共同体の感受性に甘んじるような形容詞や副詞が削ぎ落された表現を作家に、徐々に要請していく。

今日において、市場原理が支配する経済では小さな恐慌（バブル崩壊）を小賢しく演出して、神なき世界を「操作」しつつも、「計算外」の金融破綻に人々は振り回されている。中心不在のグローバル化は相対的な政治力学が支配し、出口が見えない紛争が多発している。こうした時代だからこそ、チープな英雄話、涙に濡れたゲスな悲話、道を説く頭の悪い物語に人々は身を寄せようとする。ぬいぐるみの神に縋ろうとするのだ。

安部公房は、この時代の根底に横たわるニヒリズムを、信仰にも、陶醉にも逃げ込むことなく、全身に引き受けて、言語表現を疾走させた。

さて、最後に、三浦雅士は、「二十世紀の大きな主題は弱者の救済であり、弱者への愛だ。しかし、弱者への愛には、いつも殺意がこめられている」という安部公房の言葉に言及して、「安部公房のこの愛の思想の展開を全面的に跡づけるほどの余裕も能力もない」と言って論を閉じる。

私はこの評論を読み終えて、若き安部公房のリルケ体験の底に横たわるある光景が目に見えた。それは、荒涼とした植民地としての中国大陸とそこで繰り広げられる世界戦争の凄惨な光景だ。それは神が不在となった光景。絶対なるものが立ち去った光景。「ニヒリズム」の光景。

この光景にぽつねんと佇む若き安部公房。銃に撃ち抜かれた死体、コレラ、チフスに冒された死体など、夥しい数の死体が散乱する荒野のただ中で、かたく目を閉じ、歯を食いしばる。そして、その片手には、握り締められた「リルケ詩集」。彼の内部でなにが起きていたのか。

かくして、三浦の「逆説を含むこの愛の思想にリルケの残響、いやリルケに親炙した頃の若き安部公房の思想が揺曳していることは疑いない」という言葉が心に沁みるように伝わってくる。



ご寄稿の募集

もぐら通信では、読者であるあなたのご寄稿をお待ちしております。

安部公房についての、どんな文章でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、下記のメールアドレス宛にご連絡下さい。

次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。

連絡先：eiya.iwata@gmail.com

安部公房の書棚を尋ねる

岩田英哉

2014年3月11日（火）より3月16日（日）まで、青山のギャラリー、Spacekidsにて、Project279企画・主催により、写真家、薺田純一（わいだじゅんいち）さんの写真展「書棚」が開催されました。

複数の作家の書棚の写真が壁に展示されておりました。ギャラリーのドアに入って直ぐ左に最初の部屋が、数歩進んでまた左に2つ目の部屋があり、安部公房の書棚は後者の空間に、丁度リービ英雄さんの書棚の向かい側に展示されておりました。

入室して、早速、Project279主宰の高安さんと写真家の薺田さんにお会いして、ご挨拶をし、壁に相對して、安部公房の書棚を拝見しました。

正面から見てまづ目に入ったのは、資本論全6巻です。出版社は文字が不鮮明でしたが、青木書店と読めるようでした。第6巻が全5巻の索引の巻になっています。資本論の向かって直ぐ右には、古色蒼然たるニーチェ全集がありました。これは全集本のうちの、1、2、8巻の3巻のみがありました。この箱のもう、色ならば飴色になっているとっていいような古さからいって、安部公房が成城高校時代に買った全集本に違いありません。出版社は、創元社でした。この当時のこの出版社の1、2、8巻が一体ニーチェのどの作品を収めているのかを知りたいものです。

資本論とニーチェを両隣においていることに、安部公房のところが現れていると、わたしは思いました。

その他、目についた書物には、手元のメモをもとに再現すると、次のようなものがあります。

- ・埴谷雄高の『死霊』（講談社）の6、7、8巻
- ・ドナルド・キーンさんの『日本文学史』その他の著作
- ・カフカ全集（新潮社）の3巻から12巻

- ・芥川龍之介全集の2, 3巻
- ・花田清輝の複数の書作
- ・『宮沢賢治一四次元論の展開一』（斉藤文一著。国文社）
- ・ヘンリー・ミラー全集（全13巻）
- ・『バロック論』（筑摩叢書）
- ・『Essentialist Essays』（Wain Wright著。Philosophical Library）
- ・ジャン・ジュネ全集（全4巻。新潮社）
- ・『秘密結社の手帖』（澁澤龍彦）
- ・萩原延寿著の複数の書物
- ・『バスカヴィル家の犬』（コナン・ドイル著）
- ・『カフカ論』I、II巻（エムリッヒ著）
- ・『マルクス経済学ノート』（杉原四郎、重田晃一著）
- ・大江健三郎の複数の書物
- ・三島由紀夫の複数の書物
- ・『榎本武揚』（加藤儀一著。中央公論社）
- ・『幕末明治新聞全集』の4, 5, 6上の巻
- ・『星野徹全詩集』
- ・『ドストエフスキー全集』の17巻
- ・『ボリス・ヴィアン全集』
- ・複数の岩波文庫
- ・集英社の世界文学全集

その他、まだまだありました。このような書物の名前をみるだけで、何か一寸ぞくぞくするものを感じませんか？

この書棚は、安部公房の書棚の一部に過ぎないとのことでした。すべての書棚を拝見して、安部公房のここを知りたいものだと切に思いました。

今度は、安部公房全書棚と題して、一度展覧会をまた開催してもらいたいと思うこと頻りです。

安部公房の書棚を見にゆくということで、自分ではそうは思っておりませんでした。しかし、内心は深く気持ちが高ぶっていたのでしょう。行きに電車を乗り間違え、帰りにも電車をまた乗り間違え、迷路を彷徨うようにして、失踪手前の状態に陥り、ようよう夜の遅い時間の帰宅とはなりました。



私の本棚より



[ここでは安部公房に関する新刊はもとより、旧刊でも、感想や批評を、また愛着のある書、自慢の逸品、などについてのエッセイを掲載していき、ファンの交流の場になれば、と思います。皆さまも今一度ご自分の本棚を見回して、これぞという本を取り上げてぜひご紹介くださいませ。写真画像（著作権に注意）の添付も歓迎です。]

『安部公房を語る』（あさひかわ社）

wlallen

○本文

既に第17号で紹介されていますが、思い入れのある『郷土誌あさひかわ』の安部公房の記事を一冊にまとめた本であり、かつ私も本名の岡篤史で3回寄稿させていただいたご縁があるので、改めて私の方からも紹介させていただきます。

編者の渡辺三子さんは、安部公房のいここにあられる方です。

桂川寛さんの表紙と、ご子息桂川潤さんによる装丁、鳥羽耕史さんによる序文などなど、随所にこだわりが見られます。

また、目次を見ると、そうそうたる顔ぶれです。ねりさん、実弟井村春光さん、実妹福井康子さんなど親族の寄稿もあります。中でも、井村春光さんのエッセイは、安部公房の知られざるエピソードがひょっこり出てきて、とても史料価値が高いと思います。

さらに、高野斗志美さん、保坂一夫さん、田中裕之さん、友田義行さんなどの研究者、安部公房全集の目録作成に尽力された桑原真臣さん、安部公房研究会の北川幹雄さんなども名を連ねています。

こんなにも豪華なメンバーが揃ったのは、奇跡といっても過言ではないと思います。渡辺三子さんの飾らない人柄に多くの方が惹きつけられたのだと思います。

本当にみんな安部公房が好きなんだなとうれしくなります。

渡辺三子さんとは、お電話でお話しする機会が何度かありますが、その度に「公房は幸せ者だ。こんなにもファンがいて」と仰います。

私は、逆に「公房の作品を読めて、三子さんとお話ができる自分は、幸せ者」だと感じています。

○本書の入手方法

○本書の入手方法

発行人の渡辺三子さんに電話してください。電話番号は、0166-22-2226。ちなみに、消費税増税前で、価格は3500円（送料込み）でした。限定部数なので、お早めに。



Maecenas pulvinar

『R6 2号の発明』小論

wlallen

誤解しやすいですが、人間をロボットのように操縦するから、ロボットミ手術と名付けられたわけではありません。ロボット(robot)とロボットミ(lobotomy)とスペルが違います。ウィキペディア「精神外科」の項目によると、”当項目のロボットミでは「前頭葉切除」を意味し、「大脳葉にある神経路を1つ以上分断すること」と定義される。”とあります。ロボットミ手術は、暴力的な精神病患者の治療に効果があるとされ、チンパンジーから始まり、実際に人間にも施術されたとのこと。そして、発展に寄与したエガス・モニスは、1949年にノーベル生理学・医学賞を受賞しています。(本作の発表は、1953年)しかし、その後、重大な副作用や弊害があることがわかり、受賞は誤りではなかったかという批判があったようです。また、向精神薬や脳科学の急速な発達・発展により、薬物治療などが主流になり、ロボットミ手術は忘れ去られました。

さて、本題に移りましょう。『R6 2号の発明』は、上で述べた誤解を招きそうな小説ですね。高水製作所で働いていた機械技師の主人公は、アメリカの技術出資により、仕事を失い、餓を宣告されます。「死ぬつもりになって歩いてみると」と自殺を考えているところに、学生からの奇妙な提案受け入れ、白紙にサインをし、ロボットミ手術らしき脳外科手術を受けさせられ、生きている死人、つまりR6 2号というロボットとなります。

ロボットとなった彼は、人間をいかにこき使うかという命令を忠実に実行します。その結果、奇妙な機械に高水社長は拘束され、とても人間ではできない複雑な操作を強要されます。指を次々と失い、とうとう機械に殺されてしまいます。ドクトルや他の会員は消え、所長が「何をつくるつもりだったんだ!」と叫び、詰め掛けた労働者たちが今にも殺到しそうなところで、この小説は終わります。

こき使う相手が、偶然かもしれませんが、労働者ではなく、資本家の側の高水社長であったというのは、なんという皮肉でしょう。

私が思いますには、ロボットの純粹論理にとっては、労働者と資本家の区別こそナンセンスだったのかもしれませんが。R6 2号の言葉には、ただ「人間」としか出てこない。ましてや、文庫版のあらすじ紹介にあるような「復讐」で

はありません。これは、解説を担当した渡辺広士氏の文言から取ったものと推定されますが、R62号が復讐心を持っていたとは思えません。（誤解のないように言っておきますと、渡辺広士氏の解説は良く出来ています。ただ、『R62号の発明』については、単純に「復讐」とだけ書かれているので、そこは反論しておきたいです。）ただ、純粹に、Rクラブの綱領に沿って、機械を発明しただけなのだと思います。人間が人間をより効率よく支配しようとして、ロボットを作った結果、しっぺ返しをくらう小説と言えます。ただし、人間対ロボット、資本家対労働者の単純な図式だけでは終わらないところが、この小説の不気味なところですよ。



安部公房と谷崎潤一郎

岩田英哉

山口果林著『安部公房とわたし』を読んでいます、つぎの記述がありました。思うところがあるので、わたしの考えを述べてみたいと思います。

女優がテレビ番組で訪（おと）なう土地を舞台にした小説ということで、谷崎潤一郎の『吉野葛』を読んでいた時の話です。

「マンションで「吉野葛」の文庫を読んでいる最中に安部公房がやってきた。お茶の支度をしている間、安部公房は本を取りあげ読んでいた。初めて読んだのだろう。「谷崎って僕の文体に似ている」と感心したように言った。」

最初に安部公房と谷崎潤一郎の共通点を挙げて、次に、何故安部公房が『吉野葛』を読んで、自分の文体に似ていると感心したのかを述べることにします。

まづ、安部公房と谷崎潤一郎の共通点を、思いつくままに挙げると、次のようになるでしょう。

1. 便所が好き
2. 反自然主義、反写実主義
3. 女性の体のある部位へのフェティシズム
4. 自分を異端者だと規定していること
5. 特定の女性への崇敬のこころ
6. 生理的な感覚を大切にしたこと

谷崎の著作に『陰影礼賛』という作品があります。これは、日本の文学史でも、表立った評論家の言葉の上でも、陰影豊かな日本の美を語った本だということになっています。

しかし、わたしにはそうは見えないのです。最初のページを繰って、数ページと行くか行かぬかというところで、便所の話になるのです。

そうして、延々と和式の便所が続くので、わたしはこの作品を読むと、いつもその先へ行く事ができずに、便所の記述の中で行き倒れるのです。

中央公論の文庫版の『陰影礼賛』には、複数の随筆が収められていますが、その最後に『厠のいろいろ』という題の随筆があり、厠（かわや）とは、便所のことであり、その話が実に、これもまた延々と続くのです。

これは、上に6つ挙げた共通点のうちの、6番目の感覚を大切にすることに深く通じていると、わたしは思います。1と6は脈絡があるのです。

4については、谷崎には、そのものずばりの『異端者の悲しみ』という作品があり、この中にも、その話の筋の折々に便所が複数回出て来るのです。そして、主人公、又は話者は、小説の最後の余白に、次のように独白するのです。

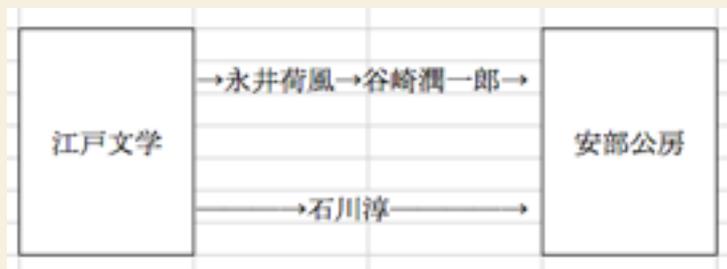
便所といい、余白に書くということといい、独白といい、これは安部公房の世界に充分過ぎる位に通じていると、わたしは思います。

「それから（筆者註：妹が死んでから）二た月程過ぎて、章三郎は或る短編の創作を文壇に発表した。彼の書く物は、当時世間に流行して居る自然主義の小説とは、全く傾向を異にして居た。それは彼の頭に醗酵する怪しい悪夢を材料にした、甘美にして芳烈なる芸術であった。」

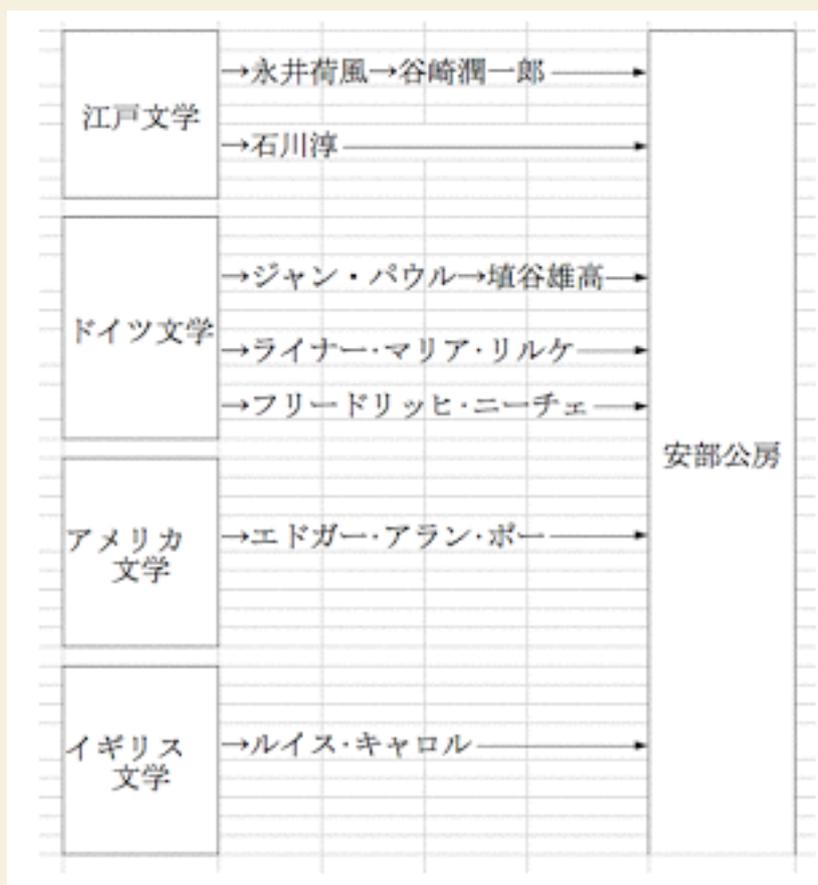
谷崎を『刺青』という短編小説で発見したのは、永井荷風でありますから、次のような文学的な系譜を書く事ができるでしょう。

江戸文学→永井荷風→谷崎潤一郎→安部公房

それに加えて、安部公房の師であった石川淳も漢学の素養豊かな、江戸文学に深く根を下ろした作家でありましたから、この系譜は、反写実主義という観点から見ると、次の様になることでしょう。



発見者としては、谷崎に荷風がいるように、安部公房には埴谷雄高がいるのである以上、埴谷雄高を加え、そうして更にこの系譜は、外国文学との関係で安部公房がその深い影響を明言している作家達の名前を加えて完成させると、次の様になるでしょう。



さて、話を、江戸文学の系譜に戻して、安部公房の文学を考えると、明治以降の作家で、19世紀の写実主義を否定して自分の芸術を完成させた作家の系譜にあり、安部公房は、その独自の位相幾何学の文学ということからであるにせよ、江戸文学からの文学的脈絡の中に位置づけることができ

るといことがわかります。

江戸の文学に造詣の深い石川淳に発見され、逆に同様の谷崎の文体に自分と似たものを発見する安部公房。石川淳も谷崎潤一郎も、ともに江戸っ子です。

江戸っ子が安部公房を発見し、同様に安部公房が江戸っ子の文学に文体の類似性を発見したというのは、実に面白いことです。

さて、谷崎との共通点の話です。

4の異端者という自分自身の、社会に対する位置の設定、いや文壇に対しても位置の設定については、論をまたないでしょう。安部公房は、内なる辺境といい、周辺飛行といい、同じ考えを、谷崎の場合とは違い全く論理的にではありますが、その同じ志操を述べていることは、読者周知のことです。

3の女性の体の特定の部位についてのフェティシズムは、谷崎は女性の足の美しさに、安部公房は女性の脚に、特に膝小僧の美しさに嗜好があったところ、フェティシズムとして共通しています。

5の特定の女性への崇敬のころといえ、谷崎は前夫人と別れてから、松子夫人への、また安部公房は1970年代、『箱男』以降は真知夫人と別居して、山口果林への、愛情を隠さなかったことは、女優の著作によって、今ようやく明らかにになりました。

このころの共通性は、一言で言うと、現実の世界をではなく、自分の想像する世界を言語によって実現するということになるでしょう。そのような自分の在り方を許容してくれる女性を、このふたりの作家は、家庭を犠牲にしても求めたところが全く一致しております。

谷崎の場合には、松子夫人とのことを書いたエッセイ、『雪後庵夜話』では、次のように書かれています。このエッセイを読みますと、谷崎は最初は松子夫人とは結婚するつもりがなかった。そのような婚姻という関係ではなく、直に創作のための芸術的な環境を保証していく異性としての、そういう意味では恋人のような女性のありかたのままに、松子夫人との生活を考えていたことがわかります。次のような箇所を引用すると、その気持ちがわかることでは

う。

「次に、その数年後、M子が私の子を生もうとした事件がある。（略）M子が私の子を生むことは、A子（筆者註：谷崎の前妻との子供のこと）の場合といくらかは事情が違ふ。だが或る意味では、一層私を当惑させる。A子は夙（つと）に私の手許を離れ、私の前の妻の側に附いて結婚してしまっている。

（略）ところで、M子（筆者註：松子夫人のこと）と私に実際の血縁のつながりが出来れば、もはや私たちの間の間隙、幾分の他人行儀、根津時代からの陰翳、と云うものがなくなる。彼女はただの世間並みの世話女房に墮落する。

（略）私は、私の子の母というものになったM子を考えると、彼女の周囲に揺曳（ようえい）していた詩や夢が名残りなく消え去ってしまうのを感じた。私はそうなったM子を考えるに忍びなかった。（略）

私がM子に妊娠中絶の相談を持ちかけた時、M子は悲しい顔をした。そして自分の生んだ私の子を世に遺したいと云った。彼女の心の奥に睡っていた母性愛が俄（にわか）に目覚め、私と云うものを改めて自分の夫として認め、それに妥協した家庭生活を営みたくなつたのである。だがそうなればこれまでのような藝術的な家庭は崩れ、私の創作熱は衰え、私は何も書けなくなつてしまふかも知れない、と、そう云つて私は繰り返し繰り返し彼女に説いた。（略）結局彼女が私の言葉を容（い）れて蘆屋の某病院でその手術を受ける氣になつたのは、お腹（なか）の子に対する愛よりも、私と私の藝術に対する愛の方が深かつたのだと、私は思う。」

これは、谷崎の場合ですが、安部公房の場合は、次のようになるでしょう（全集第1巻、267ページ。中埜肇宛書簡第9信。）。これは、『異端者の悲しみ』の中で、自分には哲学の才能はないということを知つたと書いた谷崎とは、今度はここでは、対照的に、哲学の才能のある安部公房の、谷崎が書いたことの哲学的な結婚の解釈とその理由が書かれております。

「さて、僕の結婚ですが、驚かれたでせうね。（略）僕は結婚する動機と言ふものをそれ程大きなものだとは考へません。問題は結婚した後の生活、又は生活態度に在ると思ふのです。与へられた還境と言ふものは、それが如何なるものであつてもすべて同等な課題であると思ふのです。還境といふものはやはり乗り超へて行く可きものではないでせうか。これは還境と戦ふと言ふ意味ではありません。むしろ止揚すると言つた様な意味です。勿論結婚は危険なものです。それはよく解つています。その事は眞知子にお常々話すのです。けれど、最も悲しい人間の拙さに於いてこそ、何よりも大きい課題が与へられてゐる

ると思ふのです。僕は此の孤独の中で愛を學んで行きたいと思ひます。少なくともその決心をして居ります。

サンボルと言ふものは経験の年によつて次第に老ひ込み、終ひには習慣といふ恒数に迄追ひやられ終ふでせう。これが何よりも恐ろしい生存の没落です。それは或る意味で生存の不注意から来るものです。僕はしつかりと各瞬間の存在の生誕であるサンボルを擲んで行きたい。

(略)僕は自分の孤独を最も純粹に保つて行く絶好の居城を得たと思つてみます。」

さて、6については、安部公房が、自分の文体に似ていると喝破した通りです。

何故『吉野葛』を読んで、安部公房が、そう言ったのかを以下に論じたいと思います。

それは、『吉野葛』の話の構造と道具立てが、安部公房の手紙体、手記体の小説と同じだからです。曰く、『終りし道の標べに』、『他人の顔』、『箱男』、『密会』等々。

初期の作品『白い蛾』に明らかであるけれども、安部公房は、話中話、劇中劇を、ひとつの話の中に設けます。そして、その話中話、劇中劇の媒体として、手紙や手記を使うのです。

谷崎の『吉野葛』は、まったく同じ話の構造と道具立て（手紙）を使った作品です。

『吉野葛』は、主人公（話者）が、その友人津村という男に誘われて、吉野の山深い地を尋ねる話であり、この友人は子供の頃亡くなった若い母親の面影を求めて母の地を尋ねるという話です。そして、この作品の全体には、伝説や歴史的故事がふんだんに引用され、言及されて、読者を古い時間、しかしれっきとした物語の時間の中へと誘（いざな）うように出来ています。

この作品の中心にあるのが、津村という友人が見つかる、母親が父親に宛てて書いた手紙なのです。その手紙が、話中話、劇中劇となって、読者を更にその先の世界へと誘（いざな）い、遊ばせてくれるように、話は仕組まれております。

手紙又は手記は、安部公房が愛用し、愛好した媒体ですが、谷崎は、この作品で同じ媒体を使って、話を構造化しているのです。谷崎は、『吉野葛』のみならず、『蓼食う虫』でも、実に上手に手紙というものを作品中に生かしています。その文体が、『春琴抄』であれ、『少将滋幹の母』であれ、その他の作品であれ、今こうして安部公房との比較をして考えて見ると、所謂説話体という文体であることに気付きます。この説話体に、安部公房は、「谷崎って僕の文体に似ている」と感心したのです。

安部公房の文体も説話体ということになるでしょう。それは、安部公房が娘のねりさんの質問、「どうして小説なんてものがあるの？人間は何故小説に惹かれるの？」という問いに対して、「『むかしむかしあるところにおじいさんとおばあさんがいました』という話があるだろう？あれと同じなんだよ。つまり『物語性』が小説のもとなんだ」と答えた安部公房のこころに通じております（安部ねり著『安部公房伝』、174ページ）。

『吉野葛』の出だしの数ページは、安部公房の『榎本武揚』を彷彿とさせるものがあります。非常によく似ております。それは、この話が、津村という友人の話ばかりではなく、その外側にある結構は、主人公（話者）が小説家であって、この小説家が昔の資料を読んで、現代に資料の中の話を再解釈する作品でもあるからです。

最後の生理的な感覚に忠実であったということも、ふたりの共通性であると思います。見かけ上、文体が全く異なる二人であります。安部公房が「僕の文体に似ている」と感想を漏らしたその理由は、やはり、一言で言えば、物語を語るということと、その語り口が、よく似ているという意味なのでありましょう。その物語の媒体（手紙）を使ったことといい、また物語の結構（構造）も、同じであることといい。

このような理由から、19世紀の写実主義を徹底的に否定した、その意味では自分にそっくりな江戸っ子の先達が、石川淳の他に、いたということを、谷崎の『吉野葛』を読んだ安部公房は、このとき、直覚的に知ったのだと思われま

(了)

岡田裕志の編集部員辞任について

編集部

岡田裕志が編集部員を辞任することになりました。

このような種類の文章では、その名前を呼び捨てにして格式を正して発表をするものですが、読者の皆さんには、やはり岡田さんと呼ぶことをご了解願いたいと思います。

それほど、2012年9月初旬に初めて京都の安部公房オフ会（通称KAP）でお会いして意気投合して一緒にもぐら通信発行して来たこの間、編集部員の3人で様々な議論をし、時にはお互いに反発をし、時にはお互いを受け容れるという、お互いをよりよく知るための大切な時間が、もぐら通信を発行するこの1年と半年という時間であったからです。これは、尊い時間でありました。

岡田さんの辞任の理由は、ご自身の健康上の問題と、もうひとつはある議論をした際に、どうしても受け容れられないものがあるということが、その直接の理由でありました。

唐突な辞任の弁に、岡とわたしは大変驚きましたが、頑固一徹といってもよい岡田さんの言葉ですから、わたしたちふたりはそれを受け容れることにしました。

前号の編集者短信を読んでも、岡田さんは原稿の書けないこと、ご自分の安部公房の掲示板にも投稿の出来ないことを嘆いておられたので、わたしは心配をしておりました。

議論のことは、直接の原因というよりも、その契機であったのではないかと思います。

岡田さんの担っていた仕事の穴は大きく、それをわたしたちふたりで埋めることは困難なことです。

岡田さんが鋭意担当して下さっていたのが、ニュース&記録の冒頭のページ、そして、私の本棚よりと質問箱のコーナーです。

ニュース&記録は、岡田さんの力量によって成り立っていたといってもよく、その情報収集力は並大抵のものではありませんでした。

従い、これからこのページが手薄になることは、避けることができません。読者のあなたへのお願いは、もし安部公房に関係のある情報をネットであれ何であれお知りになったならば、編集部にご一報を戴きたいということなのです。積極的に読者からの情報を掲載したいと考えております。

岡田さんは、一切の安部公房に関するネット上のアカウントを削除して、以後一切の安部公房に関する活動をやめ、おっしゃる言葉によれば、残された余生をひとりで大切に暮らしていきたいとおっしゃっています。

わたしたちは、岡田さんの築いてくれ、残してくれた財産を大切に、その上に更に一層、読者のためにもぐら通信の発展を願い、努力をして参りたいと思います。

今後とも、従前と変わらずに、もぐら通信をよろしくお願い申し上げます。



[ご寄稿に際してのお願い]

編集部

いつも貴重なご寄稿をいただき、まことにありがとうございます。
まず今後の原稿締切日についてお知らせします。よろしくお願ひします。

20号 4/25(金) 21号 5/23(金) 22号 6/27(金)

さて、お届けいただきました原稿のその後の訂正につきましては、編集の都合上、次のようにお取り扱いさせていただきたく、ご了解のほどをお願い申し上げます。

- ・訂正事項を見出された場合、出来るだけ早くお知らせ下さい。
- ・編集上の初版が成った後での語句や表現の訂正依頼は、反映できないことがありますのでご了解下さい。
- ・しかし重要な事実誤認や錯誤の訂正については、可能な限りギリギリまで受け付けます。

以上、何とぞよろしくご協力をお願いします。

読者からの感想

もぐら通信を発行していて、読者の方からの感想ほど、うれしいものはありません。以下に転載して、もぐら通信の読者のみなさんにも、ご覧戴きたく思います。一部は要約させていただきました。

メール配信担当：岡篤史

内藤由直先生より（要約）

いつもありがとうございます。

前号に引き続き、長与孝子氏の日記おもしろく拝見しました。

安部公房が忙しい毎日を送っていたのだなということが分かりました。

感想の募集

もぐら通信では、読者であるあなたの感想をお待ちしております。

もぐら通信を読んでの、どんな感想でも構いませんので、お寄せ戴ければ、ありがたく存じます。

お寄せ戴くどんな言葉も、もぐら通信発行の励みとなりますし、また他の読者の方達との共有の財産となり、わたしたちの交流を深めることでしょう。

お寄せ下さる場合には、もぐら通信に掲載してよいかどうかを付記して下さい。

掲載の許諾を戴けたら、次号に掲載したいと思います。

編集部一同、こころからお待ちしております。



【合評会】

第17号、第18号の合評会を3月10日から、「もぐら通信掲示板」で開催しました。<http://8010.teacup.com/w1allen/bbs>
第19号の合評会も近日中に行います。

【本誌の主な献呈送付先】

本誌の趣旨を広く各界にご理解いただくために、安部公房縁りの方、学者研究者の方などに僭越ながら本誌をお届けしました。ご高覧いただけたらありがたく存じます。（順不同）

安部ねり様、渡辺三子様、近藤一弥様、池田龍雄様、ドナルド・キーン様、平野啓一郎様、宮西忠正様（新潮社）、富澤祥郎様（新潮社）、北川幹雄様、三浦雅士様、鳥羽耕史様、加藤弘一様、友田義行様、内藤由直様、番場寛様、田中裕之様、中野和典様、坂堅太様、ヤマザキマリ様、小島秀夫様、頭木弘樹様、高旗浩志様、島田雅彦様、円城塔様、藤沢美由紀様（毎日新聞社）、赤田康和様（朝日新聞社）、富田武子様（岩波書店）、待田晋哉様（読売新聞社）、安部公房文学室様、日本近代文学館様、全国文学館協議会様など

この他に献呈をさせて戴くべき方がありましたら、ご推薦をお願い致します。

【もぐら通信の収蔵機関】

国立国会図書館、日本近代文学館、
コロンビア大学東アジア図書館

【もぐら通信の編集方針】

1. われらは安部公房ファンの参集と交歓の場を提供し、その手助けや下働きをすることを通して、そこに喜びを見出すものである。
2. われらは安部公房という人間とその思想およびその作品の意義と価値を広く知ってもらうように努め、その共有を喜びとするものである。
3. われらは安部公房に関する新しい知見の発見に努め、それを広く紹介し、その共有を喜びとするものである。
4. われら自身が楽しんで、遊び心を以て、もぐら通信の編集及び発行を行うこととする。

【個人情報保護に関する方針】

ご登録いただいた個人情報は、厳重に管理し、「もぐら通信」に関すること以外に使用しません。

【もぐら通信のバックナンバー】

もぐら通信のバックナンバーは、安部公房
解読工房blogの以下のURLアドレスからダウンロードすることができます。

<http://w1allen.seesaa.net/article/390509945.html>

【ニュース&記録】

<http://seesaawiki.jp/w6allen/>

【もぐら通信総目次・索引】

<http://seesaawiki.jp/w5allen/>



編集者短信

もぐら通信の編集者は何をしているのか？

3月は別れの季節ですが、まさか当編集部で別れを告げられるという事案が生じるとは思っていませんでした。彼は、優秀なライターであり、また優秀なエディターであり、さらに優秀なディレクターでした。また、個人的には、1年半もぐら通信という戦場を共にした戦友であり、また時に優しく、時に厳しい

「父」のように感じていました。彼との別れから生じる喪失感、筆舌に尽くし難い、つらいものです。

安部公房は、父浅吉氏とはあまり良好な関係ではなかったようで、作品中に出てくる「父」は、どこか一風変わった存在でした。私も、亡き実父とはうまくいきませんでした。しかし、彼とは、ネット上だけでなく、リアルでも会うことができ、良い関係を築くことができました。彼の指導や叱咤激励で、今までなんとかやれてこれました。しかし、それも終わってしまったのです。

ある日、ひょっこり、パもしくはユルバン教授として彼が編集部を訪ねてくれたら、どれ程うれしいことか。そして、その日まで、もぐら通信を発行し続けることが、残された我々の使命なのだと思います。

[wlallen]



安部公房の広場 | ciya.iwata@gmail.com | www.abekobosplace.blogspot.jp

3月の終りの3連休にドイツの旧友を尋ねてドイツに行きました。帰国して夕方わがMacintoshを開くと、MarvericsというLionの次の最新版のOSへのダウンロードの案内が画面に出たのです。一寸躊躇しましたが、結局ダウンロードすることにしました。と、一緒にこのもぐら通信を編集するために使っていたPagesというソフト迄一緒にパッケージになっていて最新版になってしまったのです。しまったのですという意味は、これが旧版の方がずっと使い勝手のよいアプリケーションであったことを、実際にこの第19号を編集してみて知ったからです。愕然としました。画面に向かって左横縦のサムネイルで簡単に（マウスの左クリックで）ページの複製ができていたものが全くできなくなっていましたし、サムネイルの小さなページをドロアンドドロップで自由自在にページを移動させることができなくなっていました。これを改悪といわずして何といはうかというものです。それまで慎重にしているLionを使っていたのですが、後の祭り。勿論Marvericsを入れて、実に使い易いことも多々あるのです。しかし、このもぐら通信を作成するには往生しました。この第19

号のページの1枚1枚はコピーではなく、最初から言わば手作りしたページなのです。岡田さんの辞任と共に、汗と涙の今号でした。●下の写真はドイツの居酒屋にて。Tobinamburというドイツ製ジャガイモの焼酎は美味かった。日本に輸入したい位です。



[タ克蘭ケ]



【編集後記】

この号の編集後記も、なるだけ岡田さんの辞任にふれないで、全く逆にどうでもよいこと、わたしの知っている何事にも世間とは無縁のこと、わたししか知らない不思議について、だれも知らないことについて、奇想異想について書こうと思いましたが、アレンさんがやはり岡田さんについて編集者短信を書くとなると、3人一緒にやって参りましたから、どうしてもその文章に引き寄せられて、誠に引力に従う如くに、この編集後記を書く以外にはありません。そのような自分を如何ともし難い。誠に、残念至極、無念至極という感じが致します。もはや安部公房の世界も離れて、余生を一人暮らしたい、だれにも邪魔されずに暮らしたいという岡田さんのメールの最後の一行が脳裏を離れませぬ。なぜなら、わたしの愛するといっている作家たちは、安部公房も含めて、その晩年は、創造した主人公ともども、ひとり孤独に帰って行く人間たちだからであり、わたしの人生の最後もやはりそうなることを、既に予感しているからなのです。これは、厭人癖とか、厭世思想とか、そのようなことではありません。どの人間の人生も一回限りの人生である以上、ひとは自身に立ち帰る以外には、遂には、ないのです。青春を賭けてマルキシズムに我が身を投じた岡田さんは、他方、組織から遠く離れて生きてきたわたしの人生、どんなイデオロギーも信じないこの人生とは軌跡が全く異なり、その人生の質も互いに異なりますが、安部公房を介して、素晴らしい議論を交わすことができたこの一年半に、この時間とこの空間に感謝する以外にはありません。折角その3日前に、そうかあ岡田さんがそれほど読んだマルクスの資本論を、よしそれではドイツ語で読んでみようというアマゾンのキンドルでダウンロードし、京都でまた語り合うことを楽しみにしていた矢先の辞任でありました。岡田裕志に幸いあれ。

もぐら通信編集部 連絡先: eiya.iwata@gmail.com

テキストを入力してください

差出人:

廣安部公房

〒182-0003東京都調布市若葉町

「閉ざされた無限」

次号の原稿締切は4月25日（金）です。ご寄稿をお待ちしています。

次号の予告

次号では、次の記事を予定しています。

1. 『けものたちは故郷をめざす』小論：wlallen
2. 三島由紀夫の『愛の処刑』と安部公房：岩田英哉
3. その他のご寄稿